

# アリュートの海獣猟と語彙

大 島 稔

## 1. 序

アリュート（アレウト、自称 Unangan<sup>1)</sup>）民族は、火山性の島々に居住し、その島は、極めて起伏の多い内陸と崖の多い海岸線から成っている。島のわずかな平地には、漿果の茂みと草が生える湿地があるのみで、山や平地に高木は一本もない。従って樹木の利用は、海岸に漂着する流木に頼らざるを得ない。気候は比較的温暖で、夏と冬の気温差は太平洋側の暖流のためアラスカ大陸に比べると小さい。しかし、その暖流のために夏は霧と雨に悩まされ、冬は強風で海が荒れ易く体感温度もかなり低下する。

このような準極地的自然環境のもとで、アリュートは、その環境に極めて高度の適応を遂げた民族と言われる<sup>2)</sup>。環境への文化の高い適応例は、アリュート伝統の生業活動の様々な面に窺える。陸上では数種の狐を（アラスカ半島とウニマク島では、トナカイや熊の大型哺乳類も）狩猟し、漿果と野草を採集し食糧とし、草から精巧なバスケットを作った。夏と冬の渡り鳥の肉と卵を賞味し、羽毛や皮を衣服に仕立てた。河川では、鮭や鱒が夏から秋にかけて時を違えて遡上するのを捕え、乾燥し越冬用食糧とした（図版1）。また海岸からは、海草や貝を採集し、沖合では、オヒョウや鱈などを釣って乾燥し食糧の少ない冬に備えた（図版2）。これらの生業にも増して海から得られる資源の利用、特に海獣猟が最も重要である。この海獣猟を始めとする海という環境への適応が

原稿受領日 1983年12月7日

1) アリュート語の表記は二言語教育で用いられている正書法を使用する。t, ch{t/ʃ}, k, q, d{ð}, s, z, x, g{r}, ʃ{X}, ǰ{ʃ}, hm, m, hn, n, hng, ng, hl, l, hw, w, hy, y, i, u, a。hm, hn, hng, hl, hw, hy はそれぞれ m, n, ng, l, w, y の氣息音化した音素を表わす。

2) 極地への適応について Laughlin & Aigner 1975 を参照。

アリュートの人口を増加させ（白人と接触を開始した頃、人口は約15,000人と推定されている）、定住生活を可能にしたと思われる。

アリュートの食生活においては、海獣と魚類（海表1 アリュートの食物水産と淡水産を含め）に依存する割合が高い。

Laughlin (1980: p. 49) のウムナク島のデータによると（表1参照）海獣が30%、魚類が30%で合計60%になる。魚類が海水産のものを含んでいる事と食生活以外の利用面も考慮に入れると、海産物への依存度は更に大きくなる。海獣の非食部分の骨は、

食品名	利用度
海 獣	30%
魚 類	30%
鳥 と 卵	20%
無脊椎動物	15%
植 物	5%以下

銚や釣針・鉤に加工され、腱は糸や綱に使われ、皮 Laughlin(1980: p49) は衣服・皮舟に、油は灯明・調味料に、内臓器官は、猟衣・長靴（図版3）・容器として利用された。道具・技術の面でも、皮舟と離頭銚（6節で詳説される）の精巧さと狩猟の正確さが不幸にもロシア占領時代の毛皮獣捕獲に利用された事実がある。また口頭伝承の素材として海が舞台となり海獣が登場することが多く、海と海獣猟の禁忌がいくつか残存していることから精神面でも海獣猟はアリュート文化にとって重要な要素であったと思われる。

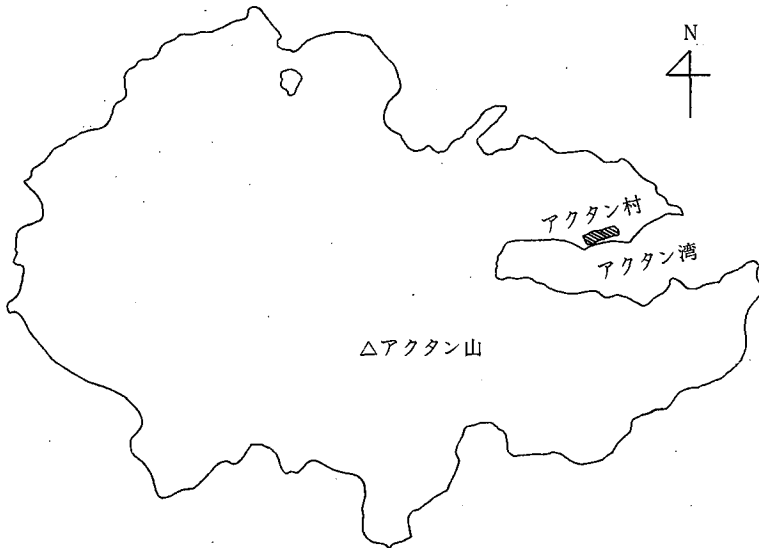
以上述べたようにアリュートの生活を知る上で、生業活動の中心である海獣猟を、環境への適応、道具と技術、知識と教育・信仰・社会組織との関連から把握することがアリュートの民族誌研究に必要不可欠である。この目的を果たすために、海獣猟の実際の活動を調べると共に、海獣の分類、自然環境観、海獣に関する信仰、海獣の形態・生態の知識、道具と技術の知識伝達、狩猟者の社会組織の面にも注意を払う方法をとった。また、上記の諸点を言語の面と結びつけ、道具・技術や海獣の名称はもちろん、活動を表わす語彙を採集した。即ち、活動の実際を探る民族誌的アプローチと語彙構造を探る（動植物から親族名称などの社会組織まで様々な語彙分野についての民族分類をとらえる）言語学的アプローチをとった。この意味で、ここにとった方法は言語人類学的アプローチと言える。

## 2. 島民の生活とインフォーマントについて

以下に扱われている狩猟活動と語彙の資料は、1981年と1982年<sup>3)</sup>の現地調査によって情報提供者である3人の古老から得たものを中心としている。

調査地は、東は、ウニマク島、西は、ダッチハーバーのあるウナラスカ島に挟まれたクレニツィン諸島の主島アクタン島（図版4）で、村は、島の東方アクタン湾に面して東西に長く伸びている。戸数17戸、人口約65名である。情報を提供してくれた古老の3人は、いずれもこの島で生まれ育った人々で、最長老のビル老人は、1904年生まれ、先代の村長であった。故ルーク老人は、1908年生まれで1982年5月に没するまで村長を務めた。ラリー老人は、1915年生まれで、調査時も元気に漁撈に従事していた。

図版4 アクタン島概略図



3) 1982年の調査は、文部省科学研究費補助金（海外学術調査）を得た「西南アラスカ・エスキモーの人類学的調査」（代表者北海道大学文学部教授岡田宏明）の分担者として行なわれたものである。

ルーク老人が母から伝え聞いた話として、母の父（即ちルーク老人の祖父）たちが同じクレニツィン諸島中の小島アバタナクから移住して現在のアクタン村を作ったと伝えている。現在この村の公用掲示板の下に、ロシア正教教会の文書で調べたという日付、1878年9月12日を村立記念日とする旨を誌してある。

村の名称、Akutan は、アリュート語で Akutanaġ と言い、もとは太平洋側寄りにある火山の名称だったが、それが島の名、村の名になったと言う。これは、akun tanaġ が語源で「海上から見て高くなっている陸地」を意味するのだとビル老人は説明している。

アリュート民族の自称は、総称的に Unangan（複数形）だが、アクタン島民の部族名は、Qigiigun（ビル老人は、「草 qigaġ の多い所の人」と解釈している）と言い、古くは、クレニツィン諸島全体の部族名であつたらしい。近隣のウニマク島民 Unimgin、ウナラスカ島民 Qawalangin と異なる部族で言葉もアトカ島の Niiġugin やアツ島の Sasxinan 程ではないが異なっていると言う。

村の歴史および、伝統文化の変容において重要な事件は、表2に示されているように、戦前の1924年から1939年頃に起きている。この間に生活様式に大きな変化があった。特に伝統的な半地下住居の「土の家」（原語で chiqim ulaġnaa）から板張りの家へ変わった点である。その後、皮舟と銛による海獣猟もみられなくなり、夏から秋にかけて集団で近隣の島、アクン島に行つて行つた鮭漁も戦後段々と行なわれなくなったと言う。

情報提供者の老人達は、青年期に、伝統の海獣猟・漁撈を体験しており、そ  
表2 文化変容の重要年代（アクタン島）

年代	生活変化
1924年頃	灯油ランプ（それ以前は、海獣油と石ランプ）から電灯へ変わった。
1925年頃	半地下式「土の家」が7軒、その後減り始めた。
1927年頃	河から水を汲み、置き水を用いていたが、水道になった。
1932年頃	最後の「土の家」が板張りの家になった。
1939年頃	1912年頃から本格的営業をしていた捕鯨基地が閉鎖された。

の記憶を今も伝え得る最後の人達と言えそうだ。以下に扱われる海獣猟活動と語彙は、断わりのない限りこれらの老人達から得たもので、必要な情報の不足している時は、他の島の調査資料<sup>4)</sup>を引用する。

### 3. 生業活動語彙

生業活動を表わす名称は、いくつかあるが主要活動である狩猟と漁撈に関わる語彙は、表3のようになる。これらの名称にみられる接尾辞 *-naag-* は「～を得る」の意味で、*ikla-naag-*「薪をさがす」などにも使われる。

漁撈活動の *qigda-* は、川で行なう鮭などのひっかけ釣漁であり、道具である鉤もその動詞と同形の *qigdaŋ* である。*imgaġ-* は、沖合で行なうオヒョウ・鰯などの釣糸を用いて行なう漁で、道具の釣糸を *imgaġiŋ* と言う。*kudmachi-* は、河口や沖で鮭などを捕る網漁で「魚網」を *kudmachiŋ* と言う。このように、漁撈は、道具の違い、即ち漁法の違いで分類される。

一方、狩猟は、海獣猟と陸獣猟の区別なく *mayaaġ-* と *alga-naag-* を使え

表3 漁撈・狩猟語彙

上位概念		下位概念	
動詞	活動	動詞	活動
<i>qa-naag-</i>	「漁撈」	<i>qigda-</i>	「鉤 漁」
		<i>imgaġ-</i>	「沖釣漁」
		<i>kudmachi-</i>	「網 漁」
<i>alga-naag-</i> <i>mayaaġ-</i>	「狩猟」	<i>ala-naag-</i>	「捕 鯨」
		<i>chngatu-naag-</i>	「ラツコ猟」
		<i>isuġ-naag-</i>	「アザラシ猟」
		etc.	

4) ウナラスカ島の資料は、Veniaminov 1840 及び 1846 (Geoghegan 1944) と Gromoff 1975。ウムナク島の資料は、Langhlin 1980。アトカ島の資料は、Bergsland 1980 及び 1981。

る。後者の語中の語幹 *alga-* は、そもそも海獣と陸獣の区別がなく広く哺乳類を指して使われる。区別するとすれば、分析的・記述的に「海の獣」*alagum alga* と「陸の獣」*tanam alga* と表現する。海生哺乳類の中でも鯨は、他の海獣のトド、アザラシ、オットセイ、ラッコと区別され、総称語 *alax* の下位区分として座頭鯨、鯨、イルカなどを含んでいる（5節参照）。

生業活動者を表わす名称にも興味ある点が指摘できる。漁撈では、*qigda-nan*「釣漁師」（*-na-* は、動詞に接尾して活動者を示す）があるが、他の漁法で活動者を示す語は、臨時に言われることがあるとしても一般的ではないようだ。狩猟者は、*alganaag-na-n* または、*mayaaĝ-na-n* と言い、共に陸獣にも海獣にも使う。海獣猟の猟師は、*alganaag-na-n* と言うが、捕鯨者は、特に *alanaag-na-n* と言われる。また、狩猟者のうち、特に専従的にその活動に従事し、優秀な狩猟者は、*-snika-*「いつも従事する」を後置して *mayaaĝna-snika-n*, *alanaagna-snika-n* と呼ばれる。これら二語も極めて定着性の高い語である。特に捕鯨者を区別する名称があるのは、鯨の捕獲は、危険も大きい（狩猟期も冬で、回収がいつも可能とは限らず、他島への寄り鯨になることもある）、捕獲した時に食糧・材料として利用できる部分も大きいという事実に関係があるのではないかと思われる。

#### 4. 自然環境の語彙

海獣猟に関わる自然環境となると、その範囲は広く、波や潮流、岩礁や海浜地形、気象や天体まで関わることになる。ここでは、時間と空間の語彙として、暦と方位・風を中心に見てみる。

##### 4.1. アリュートの民間暦

民間暦は、1年を季節に分け、更に月に分けている。週は、ロシア語 *неделя* からの借用語、*nidiliġ* を用い、アリュート語伝来の語はない。年は、表4にあるように *sluġ* である。季節に相当する語はないと思われる。月は、*tugidaġ* で、天体の月と同一の語である。

季節の名称を表4で見ると、「秋」と「春」の名称に共通の接尾辞 *-kinga*

表4 年・季節を表わす語彙

	季 節 名	関 連 動 詞
年	slu $\dot{x}$ うるう年 slum qayaa「高い年」	slu-「1年を過ごす」
夏	saaqudgi $\dot{x}$ /slu $\dot{x}$	saaqudgi-「夏を過ごす」/slu-「夏を過ごす」
秋	saaqudikinga/kiimadgi $\dot{x}$	
冬	qan'gi $\dot{x}$	qanag-「冬を過ごす」
春	qanikinga	

「～の後半」があり、「秋」は、「夏の後半」,「春」は「冬の後半」である。ここから、アリュートの民間暦では、1年を「夏の季節」と「冬の季節」に二分して把握しているのではないかと判断される。「秋」を表わすもう一つの名称の kiimadgi $\dot{x}$  は、後に述べる月の名称からの転用かと思われる。更に、名詞の季節名を動詞として用いる場合があり、この場合、「夏」と「冬」から派生した名詞である「秋」と「春」には動詞形がない。表現するとすれば「～を過ごす」という動詞 ag- を用いなければならない。この点からも、アリュートの季節は、夏と冬の二分法が基本だと思われる。

次に、表4で「年」をどう考えていたかを見ると、slu $\dot{x}$  が「年」も「夏」も意味する。この事は、「年」を「夏」で数えたのではないかと推測させる。ただし、別の方言であるアトカ方言 (Bergsland 1980) では、「冬」の qan'gi $\dot{x}$ <sup>5)</sup> も「年」を意味して使われるという。このアトカ方言では、「夏」と「冬」を数えて1年としたのであろうかと思う。

1年を12の月に分けた暦は、アクトン島からの資料として得られなかった(現在は、ロシア語の借用語を用いている)。Veniaminov (1840, 1846) から、ウナラスカ島の月の名称をまとめたのが表5である。

Cope (1919: p. 139~143) は、北アメリカの民間暦を分類し、自然現象のみに言及したものを記述的 (descriptive) 分類法、夏至または冬至を暦に

5) この qan'gi $\dot{x}$  のアポストロフィは、ng[n] との混同を避けるために用いられた正書法上の規則であり、n'g は n と g という子音の連続であることを示している。

表5 アリュートの民間暦

月	名 称	意 味	補 足 説 明
1月	tugidiigamaq	主要な月	厳寒。
2月	anulgiliq	海鷗を捕る月	海鷗を網で捕る。
3月	kaduugiġ qisagunaq/ ulam ilan qaġiq	皮革食べる先の月/家 の中で食べる月	昼が夜より長くなる。夜、 火を燃やすのをやめる。
4月	agaluugiġ qisagunaq/ sadagan qaġiq	皮革食べる後の月/家 の外で食べる月	夏鳥・海獣(トド, オット セイ)が移動して来る。
5月	ichichġux/ chigum tugidaa	花の(咲く)月	草が生え出す。トド, 雄 のオットセイの狩猟。
6月	chaġaligim tugidaa	鳥・海獣が子を産む月	
7月	sadignam tugidaa	海獣が母乳で太ってい る月	鳥のひなが現われる。海 獣の仔が活動始める。
8月	ugnam tugidaa	海獣がやせる月	草がしおれる。ひな鳥が 飛び立つ。
9月	chngulim tugidaa	海獣の毛, 鳥の羽が落 ちて毛変りする月	
10月	kiimadgim tugidaa	オットセイ狩りの月	オットセイが北から移動 して来る。
11月	kiimadgim kangin tugidaa	狩猟の後の月	
12月	agalġaluq	アザランを罠を使って 捕獲する月	

組み込み名称としているものを天文的 (astronomical) 分類法, 自然現象の他に序数詞を用いるものを数による (numeral) 分類法と3つの類型に分けている。Cope (1919: p. 153) は, Veniaminov の資料に基づきアリュート暦を「数による類型」としている<sup>6)</sup>。これは, 年初めの「1月」の名称が, tugidi-

6) 3月の名称を Veniaminov (1840) の HRAF 英訳 (p. 257) と Cope (1919: p. 153) で「kaduugiġ または, qisagunaq」としているのは, kaduugiġ qisagunaq とまとまった語句と思われる。kaduugiġ は, 次の4月の名称にある agaluugiġ と対をなして, 「前の」「後の」とそれぞれ用いられるからである。Gromoff (1975: p. 19) を参照。



igamaq「主要な月」で、記述的名称ではなく、「主要な」を順位を示すと考えたからである。しかし、「1月」を数による名称、「3月」と「4月」、「10月」と「11月」を数的名称の関係にあるとしても、月の名称に記述された自然現象に海獣と鳥に関する言及の多いことは注目に値する。

6月から12月までは、海獣(と一部には、鳥)の繁殖期、出産、養育、毛変わり、狩猟期を記述している。狩猟者として観察した結果であり、これらの名称の存在が、狩猟の知識を伝承する役割も担っていたと思われる。現代の生物学者の記述によると「トドは、5月上旬に繁殖期が始まり、6月下旬に出産のピークを迎え、7月中旬で養育を終え、雌獣と幼獣は、雄獣のテリトリーを離れる。冬になるとアリューシャン列島の海峡・湾に避難するか、更に南西アラスカ海岸を南下する」(Rearden 1981 : p. 55~p. 56) と言う。この記述に照らしても狩猟者の観察は、かなり正確なものであった。

更に Gromoff (1975 : p. 19) の同じウナラスカの暦には、鮭の名称による月の名、「7月」aanum tugidaa「紅鮭の月」が見られる。Bergsland (1980) のアトカ方言の暦には、「11月」kyum tugidaa「ムラサキ貝の月」という海産の貝類に言及した月の名称がある。

#### 4.2. 風と方位の名称

日本語の方位は、基本的に東西南北の四方体系である。また、風の名称は、方位の別により北風、南風などと区別する。しかし、日本各地の漁村ではこの方位に依らない風の名称が使われている。シモカゼ(北東風)、ヤマセ(南東風)、ヒカタ(南西風)、タマカゼ(北西風)などである。

アリュートの方位は、風の名称と関係が深く、方位と風を分けて考えるのは難しい。表6は、左欄にアクタンの風の名称、右欄に Bergsland (1981 : p. 43) によるアトカの方位名称を掲げた。アクタンの風の名称にある axtax は、「通過する」の意味で、この語を取り除くと方位名称として用いることができる。アトカ方言も同様に、N, E, S, W などの方位名称に slux「風」を加え、そのまま、風の名称になる。

アクタン島の風・方位名称のうち、N と NE は、qiga- という語幹から

表6 方位・風の名称

方言名 方位	アクタン(風の名)	アトカ(方位名)
N	qigaadiġ	chugum hadaa
NE	qigaagan axtaġ	qigaadiġ
E	qagaadaan axtaġ	qagaahadaa
SE	num adaan axtaġ	qagaygiġ
S	agaaġilaġ	nam hadaa
SW	achaġuġ	naangatxuġ
W	naadaan axtaġ	naahadaa
NW	chugum adaan axtaġ	sadaġuġ

の派生である。従って qiga-, qaga-, nu-, aga-, 'acha-, na-, chugu- の7つの語幹が基本となっている。このうち, acha- 以外は、「こ・そ・あ」の体系のように空間的位置を示す「指示詞」の類で専ら, 方位・風向を指す働きがある。acha- は、「上・下・内・外」のような相対的位置を示す「位置詞」の類であり、「外」の意味である<sup>7)</sup>。

アリュートの方位は, アクタンの資料から見ると, 少なくとも, 東西南北の四方位よりも多いと言える。この方位区分の多さと風と密接な関係のある点は, 海獣猟や沖合漁撈が風に影響され易く, 列島は風向が変わりやすく, 風向きによって気象や海上の波の状態を知る必要があったことと関係があると思われる。ビル老人は, 東と北東風は, 霧をもってくると言っている。ビル老人の父は, 海に出る朝, 早く起きて外に出て, 風向きで天気を予想し, 潮の干満の時間を心得た猟師であったと言う。

7) アトカ方言の NW sada- も「外」の意味で, 他の名称の語幹と異なり, 位置詞類に属している。指示詞も位置詞もアリュート語の語彙の中で数も多く複雑な体系をもっている。指示詞については, Bergsland (1973) が詳しく論じている。

### 4.3. 地形と地名

地形(山, 川, 海浜, 海上) 語彙と地名 (Bergsland 1959 参照) も海獣猟にとって重要である。ビル老人は, アクタン島と近くのアクン島の地名に詳しい。アクン島は, 夏・秋の鮭漁期のキャンプ地(実際には, かなり恒常性の高い半地下式住居を建てた村であったと言う)として, またアクタン島とアクン島間の海峡は, 海獣(特にオットセイ)の南下ルートとして重要であった。更に東方, アラスカ半島に接するウニマク島も海獣猟の狩猟地であった。

このように狩猟のため海上を遠く出かける時に海岸線の地名と地形は, 生死に関わるので重要である。また, 海岸の崖に登って行なう鳥の卵採集 (uxchuñ ツノメドリなどは, 成鳥の羽を服の飾りとした) のためにも地形を知る必要があった。それで子供を舟に乗せて行き, ある場所で下ろして村まで歩いて帰らせるという訓練をしたそうだ。

## 5. 海獣の分類と生態

トド, アザラシの生息数は, アリューシャン列島海域に特に多く(以下の数字は, Rearden 1981 に依拠する), アザラシ (Harbor (hair) seal) は, 1972年の原住民以外の狩猟を禁止した年の統計によると, アリューシャン列島が, 125,000頭で, コディアク島の3,500頭を大きく引き離している。またトド (Steller sea lion) は, 1972年同統計でアラスカ全体200,000頭のうち, 列島に約50,000頭, 列島内では, アクタン島に最高数の15,700頭が生息している。オットセイ (Northern fur seal) は, プリビロフ諸島で世界全体の約80%が繁殖し, 10月, 11月に列島を通過して南下する。ラッコは, 1867年アラスカ購入時には, 600,000から800,000頭の間と推定され, 1973年統計では, 100,000から125,000頭の間で, 列島を中心に生息している。

生息数が多く狩猟対象ともなっているこれらの海獣の名称を調べたものが表7である。海獣は, 3節に述べたように陸獣と区別される時に *alağum algaa* と呼ばれ, 鯨 *alañ* を除いた海生哺乳類を指すことが多い。海獣名称には, 表7の他にセイウチ (Walrus) *amgaadañ* があるが, 列島では, 時々, 時化や風

表7 海獣の名称

総 称 称	下 位 語
qawaã トド	qawatxiã 雄の中で最大のもの uãinaã 雄 xulstaakaã(R.) 未婚雄 qawam ayagaa 雌 qawaadaã 仔
isuã アザラシ	ungim kangan sigaa 雄の中で最大のもの isuãim aliãa 雄 isuãim ayagaa 雌 isuãaadaã 仔
laaquadã オットセイ	aataax 雄 xulstaakaã 未婚雄 laaqudam ayagaa 雌 laaqudaadaã 仔
chngatuã ラッコ	chngatum ayagaa 雌 chngatum ciidaa 仔

向きの関係で流氷に乗って現われる以外に見かけないそうだ。アクタン島の古  
 老は、狩猟しなかったのではないかと言うが、「セイウチの牙」を意味する語  
 tumgaã が存在し、伝統的狩猟帽子(chagudaã)の装飾として利用されている  
 ことから、以前は、アラスカ半島部まで狩猟に出かけたか、交易で手に入れた  
 ものかと思われる。

海獣の中で最も多く狩猟され、食糧・材料として利用されたのは、トド、ア  
 ザラシ、オットセイである。ラッコは、伝統的な狩猟対象獣でなかったようだ。  
 ロシアの毛皮交易にラッコ猟が始まったと言う。その事は、ラッコの名称が、  
 chnga-tu-ã (chnga-「毛」-tu-「多い」——即ち「毛の多いもの」)といい、

二次的な派生名称であることから窺える。また、ビル老人の伝える民話として「いとこ同志の二人の男の子がいた。ある日、海で東西に分かれて泳いでいたが、二人共自分達の島に帰れなくなり、気づいてみるとラッコになっていた」というラッコの先祖が人間だと言う話があり、人間が先祖なのだから狩猟しなかったと言うし、ロシア時代にも毛皮をとっても肉は食用にしなかったと言う。

表7の下位語の欄を見ると、トド、アザラシ、オットセイに雄成獣を表わす特別な語があるのに気づく。トドの最大のものは、qawatxiḡ と言い、雄は ugiṅaḡ で、若くハーレムを持っていないものは、xulstaakaḡ (ロシア語 *холостяк* からの借用で、アリュート伝来の名称は不詳である) と呼ばれる。オットセイも同様に、雄成獣が aataax と区別されている。アザラシの雄成獣は、isugim aliḡa「アザラシの雄」以外になく、最大のものを特に ungim kangan sigaa (「男根まで一ひろの長さ」という。

雌は、分析的に二語で、ayaga- を用い「～の雌」と表現される。トドの幼獣養育期の雌は、授乳で脂の乗った胸肉が賞味されるので、特に umchuḡ (umchu-「吸う」と呼ばれる。

幼獣は、トドを qawaadaḡ, アザラシを isugaadaḡ, オットセイを laquudaadaḡ と言い、共に -(a)adaḡ という指小辞を接尾する。一方、ラッコは、その幼獣を chngatuudaḡ と言えず、chiidaḡ「海・陸獣及び鳥の子供」を用いて表現する。アクタン島で得られなかった資料で、更に細分した分類が、アトカ方言 (Bergsland 1980) にみられ、アザラシ1歳未満で母獣の元を離れたばかりのもの chagaliḡ, 二歳のもの algim chngaḡ inatiḡ (「二回目の毛変りしたもの」) がある。

鯨の名称は、表8に掲げてあるが、情報提供者の老人たちにも伝統的狩猟の経験がなく、特にアクタン島には、20世紀初頭ノルウェー人が捕鯨基地を設け、古老達も若い頃、近代設備の捕鯨船で働いていたのでアリュート伝統の捕鯨に関する情報は少なかった。また鯨の名称も、性別、年齢別の区別があるかどうか確認できなかった。

海獣の身体部位名称は、ほとんど人間の身体部位名称 (詳細な研究として

表8 鯨の名称

総 称	下 位 語
alaġ 鯨	umġuliġ しろながす鯨
	agdagiġ まっこう鯨
	alamax 座頭鯨
	mangiidaġ ながす鯨
	aġluġ 鯨
	kulamax せみ鯨
	agamaġchix いわし鯨
	alaadaġ イルカ

Marsh & Laughlin 1956 がある) とほとんど同じで(毛皮 igluqaġ は別にしても) アザラシの前ひれ足は, chakix で, cha-「手」と同じ, 後ひれ足は, kitakix で, kita-「足」と同じである<sup>8)</sup>。アリユートの解剖語彙は, 精緻を極めたもので, 海獣と人間の比較も行なわれたと見え, 対応する器官を同じ名称で指している。この知識は, 古く死体をミイラ化した葬制の習俗にも関係していて, ミイラのための解剖と海獣解体の日常の実践が相乗的に働いて詳細な解剖知識を代々伝承させる結果となったと思われる。

## 6. 皮舟と狩猟具

### 6.1. 皮 舟

舟に関する語彙は表9に掲げる他に, ayġaasiġ と sunaġ がある。ayġaasiġ は, ayġa-「海上を進む」から派生した「海上航行に使うもの」の意味で, 舟の総称として用いられる。sunaġ は, ロシア語 судно からの借用語で帆船, 汽船の外国船を指して使われる。

アリユート伝来の舟は, いずれも皮張りで, トドかアザラシの皮 (igluqaġ) を3~4枚縫い合わせて作った。流木で枠組みを作るのは男の仕事で, 海獣皮

8) cha-kix, kita-kix の -kix は, 双数形で2本のひれ足を指す。

を縫うのは、女の仕事である。特に女性が裁縫する時には、身体を洗い淨め、髪を洗って束ねて仕事をした。髪の毛が縫い目に入らないようにするためである。また野草など陸でとれた草が縫い目に入るのも嫌った。このタブーを破ると海獣は、髪の毛や草を嫌って狩猟者を近づけないとされた。

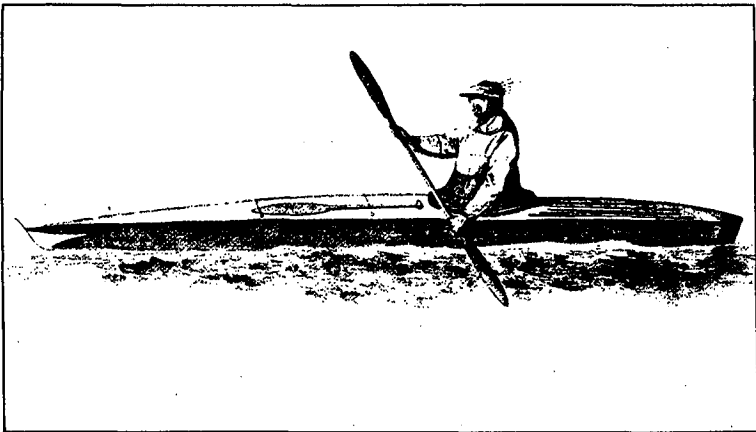
表9 皮舟の名称

iqaḵ/iqaadaḵ 一人乗り用カヤック型	
uluḵtax	uluḵtaadaḵ 二人乗り用
	uluḵtalḡuḵ 三人乗り用
niḵalaḵ ウミカヤック型	

皮舟の iqaḵ, uluḵtax は、カヤック型で図版5にあるように甲板部分も皮張りである。これらは海獣猟・捕鯨に用いられた。三人乗りの uluḵtalḡuḵ は、狩猟よりも人の運送手段として使われ、鮭漁などで家族で近隣の島に行く時や宣教師を乗せる時に使われたと言う。ウミカヤック型の、舟底にだけ皮を張ったオープン・ボートの niḵalaḵ は、アクタン島では、猟に用いなかったと言う。プリピロフ諸島では、現在も流木集め、石炭運送に用いているのだそうだ。

このカヤック型とウミカヤック型の区別は、櫂の形状・種類の違いと対応して

図版5 カヤック (iqaadaḵ) を漕ぐアリュート



University of Washington, Seattle. Edward W. Allen Collection.  
Morgan 1980: "The Aleutians" より転載

表10 櫂の名称

櫂の種類	関連動詞	用途
aqadguusiġ 片車櫂 angaġuusiġ 両車櫂	iqaġi- 片車櫂で漕ぐ angaġu- 両車櫂で漕ぐ	iqax̄とuluxtax̄に用いる
qisngiisiġ 舵 nuġaasiġ オール	qisngi- 舵を取る nuġaada- 漕ぐ	nix̄alax̄に用いる

いる。表10にあるように「車櫂」はカヤック型皮舟に使われ、オールと舵がウミヤック型皮舟に使われる。更に、車櫂には、片車と両車があり、その用途の違いは残念ながら不詳であるが、関連動詞にも片車櫂と両車櫂に区別が見られる。

表11に掲げたものは、アクタン島で得られた皮舟の部分名称である。舟首の形状は、図版5のように、二股状に裂けた形が特徴的で、アトカ方言 (Bergsland 1980) では、changix は、舟首全体の他に裂けた二股の上部のみを指しても使われ、その時、下部の名称は、iiguyaaġ と言う。これは、ラッコが海上に、背を下にして浮かんで食餌・授乳する時の姿勢で、顔の前に前足をもつ

表11 皮舟の部分名称

changix	舟首
ukangaġ	舟尾
chuniġ	竜骨
unmaxikix	舷縁
agdangin	甲板上の肋材
kilġingin	舟底の肋材
uluġ	乗り口
sukaġ	乗り口の防水胴衣
chudġusingin	防水胴衣のひも
axtuusiġ	防水胴衣のひもで背中から肩に斜めに縛るひも



てくる姿を模倣したと言われている (Laughlin 1981 : p. 34)。竜骨の *chuniŋ* が「背骨」、肋材の *agdaŋ* が「肋骨」であるのも舟をラッコと見たてていることと関係があると思われる。

皮舟の乗り口には、防水胴衣が装備してあり、図版5のように狩猟者は、オットセイの腸膜で作った防水猟衣の上下服 (*chigdax* 双数形) を着てフードを被って、更にその上に木製狩猟帽 *chagudaŋ* を被って乗る。乗り口の囲りの胴衣 (*sukaŋ*) を胸まで引き上げ、周囲の紐 *chudgusingin* を縛ってしぼる。更に胴衣の紐 *axtuusiŋ* を肩から胸元へたすきにかけて、胴衣が下がらぬようにする。こうすれば、完全な防水ができ、乗り口から船体内に水が入らなくなる。この船体内部には、水入れの *taangadguusiŋ* を常備し、また解体した獲物・魚を入れる。また、甲板上には、トドの胃袋で作った浮袋 *anikaasiŋ* を置く。梓木の材料である流木のスギ (*laluŋ*) と皮のために舟の重量は軽く、獲物の運搬も水の浮力を利用できるので、陸上に比べて重い物を一度に運べるという利点がある。

## 6.2. 狩 猟 具

アリュートの狩猟具の特徴は、獲物に刺さると鉋先が中柄からはずれる離頭鉋と、鉋の投てき距離を伸ばす投槍板 (図版7) である。全ての海獣にこの鉋

図版7 鉋と投槍板

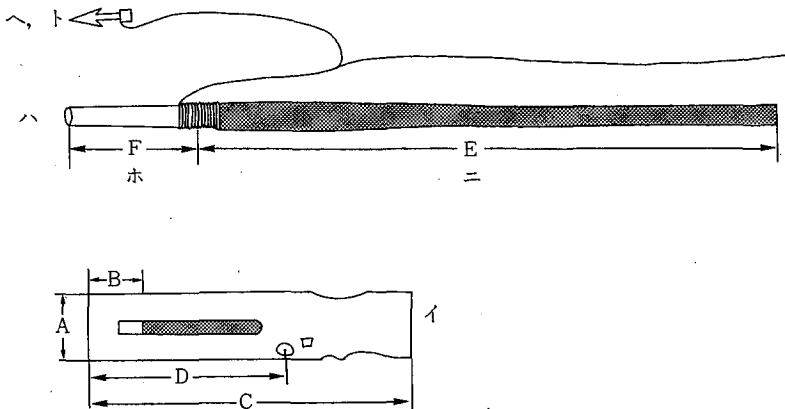


表12 銛の名称と製作

イ. asxu̇x̄	投槍板	A : 人差し指・中指・薬指の3本の指幅
ロ. atxu̇x̄	人差し指を入れる穴	B : 同上
ハ. iglȧx̄	銛全体	C : 中指と親指を広げた長さに親指の第一関節までの長さ
ニ. agadȧx̄	柄	D : 人差し指と親指を広げた長さ
ホ. tumgȧx̄	中柄	E : 顎から人差し指の間
ヘ. saxsi̇x̄	曲がった鏃	F : 人差しと親指を広げた長さに第2関節を折り曲げた人差し指と親指の間の長さ。
ト. ayaquudȧx̄	まっすぐな鏃	

が使われた。ただ銛先の鏃が獲物によって異なっている。ラッコには、ayaquudȧx̄ と呼ぶまっすぐな鏃、オットセイ、アザラシ、トドには、曲がった鏃 (saxsi̇x̄ または、saxsiidȧx̄) が使われる。この saxsi̇x̄ は、海獣が海を潜ったり浮いたりして進んでいる時に有効で、射たれた銛は、一度海に潜って海上に浮きあがり、海獣の動きに合わせるようにして獲物を仕留める。この他に、石製(海獣用鏃は骨製)の鏃 chungulum saxsiidȧx̄sigii があり、戦争に用いられた。

投槍板 asxu̇x̄ は、iglȧx̄ (銛) の柄頭を、板の中央の溝に当て atxu̇x̄ に人差し指を入れて肩の後方まで腕を伸ばして投げる。こうして腕の振りを大きくできるので最大約45mも投げることができたという。asxu̇x̄ は、時に失なうことがあるので、アザラシの腰骨を予備に舟上に積んでおく。

名称について言うと、指を入れる穴は、atxu̇x̄ と呼ばれ、「指」の意味で、銛の中柄の tumgȧx̄ も「牙」の意味であるのが、特徴的である。この他に asxu̇x̄ の表の赤色(図版6参照)は血を表わし、裏の黒色は、海獣の毛色を象徴したものだと言う。

この銛と投槍板の製作は、表12のA～Fにあるように製作者の腕・指を使って計るので極めて個人的な所有物であり、他人は使うことができない。アリュートは、冬に集まってする賭け事が好きだった。トドの指関節をサイコロに行なう maqȧx̄ というゲームでは、皮舟から家まで賭けることがあるが、この

銛だけは、製作者本人しか使えないので賭けることはなかったと言う。

### 6.3. 狩猟活動

皮舟と銛の組み合わせで行なう海獣猟活動をアザラシ猟を例にして概観してみる。アザラシ猟は、数双の *uluḡtaadaḡ* (二人乗り) で行く。これは、特に嵐に襲われた時、舟を結びつけることで難を逃れるのに便利だと言う。*uluḡtaadaḡ* に乗るのは、父と子または、叔父とおいの組み合わせで、*agitaadaḡ* (パートナー) と呼び合う。前に乗るのは、熟練者で、後部に乗る者は、*ukaatxiḡ* と呼ばれる。獲物を見つけると、權を上げて知らせる。すると他の舟が遠巻きにして、最初に見つけた舟の前の座席の者が一番銛を射つのを待つ。後席の者は、舟が揺れないように權で舵を取る。二番銛は、同じ舟の後席の者が射つ。その銛も失敗すると他の舟の者が銛を射ってもよい。銛が刺さると、鎌が抜けて、綱のついた鎌が海中へ引きずり込まれるが、息をする度に鎌が体中に深く食い込むので、アザラシは息苦しくなって水面に浮かぶ。それを棒 (*anax*) で頭部を打って絶命させる。解体は、岩礁が近くにあれば、そこまで獲物を運んで行なう (図版8 参照)。解体した肉・骨・皮などは皮舟の中に入れて、更に猟を続けるために獲物を追う。

この舟の操作・銛うちは、全て坐って両足を伸ばした姿勢で行なう。このために、生まれたばかりの子供の足を膝の所で皮ひもで縛り、足を伸ばしたままの状態にしておくと言う。また、遊びの中にも銛うちが取り入れられ、図版9の *ayaquḡ algaa* 「投矢の海獣」の標的に3本の矢羽のついた鯨骨製の投げ矢 *ayaquḡ* を投げ合う。この標的の中央の点と線 (赤は血の色の象徴である。図版9 参照) が高い点数である。この標的をお互いの右隣に吊るし、競技者が向かい合って両足の膝を伸ばした状態で投げ合い、点数の高さを競う。向かい合っているので相手にあててはたいへんなので、真剣なゲームだと言う。また銛うちの訓練は、若者が舟の後席に坐っている間の2年間、毎日家の外で何時間も投げる訓練をし、初めて前の座席に坐り、一番銛をうたせてもらえるとと言う。

## 7. 結 語

アリュート伝統の海獣猟活動と語彙を3節から6節までに見てきた。3節では他の生業活動である漁撈とその語彙とを比較し、漁撈が漁具・漁法に基づいて区別されているのに対して、海獣猟は、道具・技術的に区別されていない(6節参照)ということがわかった。海獣猟の中でも捕鯨は、語彙的にも区別されていると思われる。4節では、民間暦を取り上げ、一年が基本的に夏と冬の季節に分割されていること、月の名称に狩猟の出産・養育から狩猟期までの知識が盛り込まれていることが指摘された。更に、方位と風の名称の間には、密接な関係があり、方位は、海上生活において、重要性をもつので、四方位以上(アクタンでは、七ないし八方位と考えられる)の体系となっている。5節では、海獣の名称を扱い、雄成獣に特別な名称が見られること、海獣と人間の解剖用語が同じであることに特徴がある点を指摘した。6節では、皮舟の分類と、構造を示す部分名称をみた。また、離頭銜の製作と部分名称を掲げ、銜と投槍器が極めて個人的な所有物であることが指摘された。また6節では、アザラシ猟を例に狩猟行動を概観し、皮舟操作、銜うちの訓練がゲームの中でも行なわれることを見た。

このようにアリュートの海獣猟は、アリュートが海上での生業活動を有効にするため、道具・技術の面でも、海獣の形態や生態及び環境に関する知識の蓄積・伝達の面でも、更に狩猟技術の伝達やそれに伴う人間側の組織の面でもアリュート文化の中で高度な発展を遂げた分野と言える。本論文で海獣についての信仰や社会組織についての情報は断片的にしか触れられていない。これらの点については、今後、語彙構造の分析を中心とし、民話や伝承を分析することで、更に広く深い知見が得られるであろう。

## 引用文献

- Bergsland, K. 1959. "Aleut Dialects of Atka and Attu." *Transactions of the American Philosophical Society*, Vol. 49, Part 3. Philadelphia.
1973. "Aleut Deixis." *Norwegian Journal of Linguistics*, Vol. 27.
1980. *Atkan Aleut-English Dictionary*. National Bilingual Materials Development Center.
- Bergsland, K. & M. Dirks. 1981. *Atkan Aleut School Grammar*. National Bilingual Materials Development Center.
- Cope, Leon 1919. "Calendars of the Indians North of Mexico." *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*, Vol. 14, No. 4.
- Gromoff, Ismail 1975. *Aleut for Beginners*. Aleut Language Instruction, Unalaska City School.
- Laughlin, W. S. & Jean S. Aigner 1975. "Aleut Adaptation and Evolution." Fitzhugh, W. (ed.) *World Anthropology: Prehistoric Maritime Adaptation of the Circumpolar Zone*. Mouton.
- Laughlin, W. S. 1980. *Aleuts: Survivors of the Bering Land Bridge*. Holt, Rinehart and Winston.
- Marsh, G. H. & W. S. Laughlin 1956. "Human Anatomical Knowledge among the Aleutian Islanders." *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol. 12, No. 1.
- Morgan, Lael (ed.) 1980. "The Aleutians." *Alaska Geographic*, Vol. 7, No. 3. The Alaska Geographic Society.
- Rearden, Jim (ed.) 1981. "Alaska Mammals." *Alaska Geographic*, Vol. 8, No. 2. The Alaska Geographic Society.
- Veniaminov, I. 1840. *Notes on the Unalaska District*. HRAF files, M-5.
1846. *Опыт грамматикии алеутско-лисьевского языка*. Санктпетербург (Geoghegan, R. H. 1944. *The Aleut Language*. U. S. Department of the Interior.)

図版1 鮭の乾燥



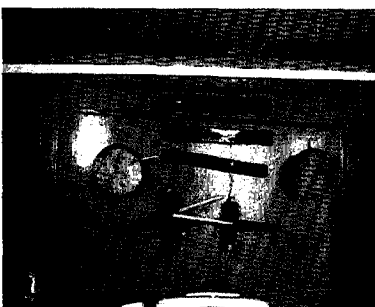
図版2 オヒョウの乾燥



図版3 オットセイの喉(長靴を作る)



図版6 アリュートの猟具



製作者のビル老人は、数少ないアリュート伝統民具の製作者である。

上より、海獣用鉗と投槍板、左右に *miiġaġ* 太鼓、下は、狐畏 *kliisaġ*

図版8 解体中のトド



図版9 アリュートの遊び・投矢 (*ayaquġ*) の標的

